ブラジル

文化の力で子どもに希望を

ジゼラ・アランテスさん（婦人部本部長）

一、私とＳＧＩ（創価学会インタナショナル）の出あいは1990年2月、サンパウロ美術館で開幕した「珠玉の日本美術名宝展」です。東京富士美術館が共催した同展に、スタッフの一員として携わることができました。当時は未入会でしたが、ブラジルＳＧＩのメンバーや日本のスタッフの人柄に心引かれ、仕事には大きな充実感がありました。

また、ブラジルとの友好のために出展された貴重な品々を見て、文化の力を心から理解されている池田先生に、深い尊敬の念を抱きました。

2年後、友人から紹介を受け、私はブラジルＳＧＩに入会することができました（拍手）。

一、入会前、私は子どものころからの夢だった女優をしていました。いくつもの舞台をこなし、ブラジルで大変に人気のあった子ども向けテレビ番組でも主演を勝ち取りました。しかし、その後、仕事に行き詰まり、初めて人生を見つめ直しました。何のために演じ、何のために生きるのか。この根源的な問いに応えてくれたのが仏法でした。

信心をして、私の考え方は一変しました。女優としての仕事も、ほかの芸術や文化も、人間の無限の創造性、人間の素晴らしさを表す、生命の発露なのだと心から理解できるようになったのです。

表現することの本当の喜びを知った私は、女優だけでなく、自ら脚本や演出にも精力的に取り組みました。

2003年から文化事業をプロデュースする会社に所属し、いくつもプロジェクトを手掛けました。

ＳＧＩの活動から着想した、子どもたちに環境保護の大切さを伝えるプロジェクトでは、制作から実施まで、全ての責任を担いました。これが大きな反響を呼び、ブラジルの90都市で25万人が参加するという大成功を収めることができたのです（拍手）。

一、しかし、何もかも順調だと思っていた08年、突然、会社から電話一本で解雇を告げられました。たった一日で、何もかも失ったと、私は絶望し、孤独に苛まれました。

そんな時、先生が、スピーチの中で一句を紹介されました。「我も師子／君も師子たれ／師弟不二」と。

そして「破邪顕正の堂々たる師子吼で、嫉妬の悪人たちのデマや中傷を、毅然と打ち破っていくのだ。私は師子である。何も恐れない。皆さんは、一人立つ『正義の師子』になってもらいたい」と、烈々たる気迫で語られました。

まるで、気弱になっている私に向かって言われているようでした。

〝何があろうと、私は世界一の師匠の弟子だ。師子の子だ〟。こう思うと勇気が出ました。

先生の真心に応えようと、私は2年前、自らイベント会社を立ち上げました。

祖国の繁栄を願い、喜び勇んで広布の活動に励む、アランテスさん（2列目左から4人目）と近隣のＳＧＩメンバー

学会活動にも一歩も引かず、全力で取り組みました。ちょうどこのころ、支部婦人部長の任命を受けました。多忙を極める仕事との両立には、今までの何倍もの知恵と忍耐が必要でした。毎日午前4時半に起床。1時間半の題目を唱えてから出勤しました。時間をこじ開け、活動に全力で取り組みました。支部で30世帯の折伏が成就し、私自身も3人の友に御本尊流布をすることができました（拍手）。

さらにうれしいことに、昨年1月に総合方面で開催した青年文化祭で、舞台演出のお手伝いをさせていただいたところ、演劇に携わってくれた未入会の青年が心から感動し、6人が自ら進んで入会したのです（拍手）。

本年からは婦人部本部長の使命を頂き、さらに青年を育成していこうと決意しています。

広布の前進とともに、仕事も軌道に乗り始めました。子どもたちにブラジルの素晴らしさを感じてもらうために手がけた教育プロジェクトは、文化省や大手企業の後援を受け、大成功で初演を終えることができました。これから、ブラジル全土に展開していく予定です。

一、10年前、先生は長編詩「世界の王者たれ！ ブラジル」で、「広宣流布とは／『師弟の戦』である。／『絶対に勝つ』とは／『絶対に勝つ人』である。／ブラジルとは／『絶対の希望』である」とつづってくださいました。

これからも文化の力でブラジルに希望を送り、絶対に勝利し、先生にお応えしてまいります（拍手）。

紙の
グローバルパートナー
国際紙パルプ商事
KOKUSAI PULP&PAPER CO.,LTD.
東京都中央区明石町6番24号